

国立台北教育大学における山口大学日台交流美術展

-八景用意展について-

中野 良寿・福田 隆眞・小松 実美*・佐藤 文恵*・山下眞麗子*
松井茉莉奈**・臼杵万理美**・梅原 望**・藤井 理恵**・安田剛史郎**

The Japan-Taiwan Art Exhibition by Yamaguchi University at National Taipei
University of Education: About the outline of Hakei-youi art exhibition

NAKANO Yoshihisa, FUKUDA Takamasa, Komatsu Mitsumi*, SATO Fumie*,
YAMASHITA Mariko*, MATSUI Marina**, USUKI Marimi**, UMEHARA Nozomi**,
FUJII Rie**, YASUDA Koshiro**

(Received January 11, 2011)

キーワード：台湾、美術展、美術教育、国際交流

はじめに

本稿は2009年11月に台湾の国立台北教育大学でおこなった山口大学交流美術展「八景用意展」について述べる。この交流展は2006年に、台湾の国立台北教育大学の学生が山口大学大学会館において行なった「藝質介入展」からはじまる交流展である。この学生交流展に続いて、2007年には山口大学教育学部美術教育の学生有志が台北教育大学において交流展を実施した。このことはすでに山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要大25巻に「山口大学教育学部美術教育と台北教育大学との学生交流展」（2008年）として公表している。そこでは「十人十色」と題して、各学生の個性を表現することを目的とし、全体の展示としては、繊細でまとまりのある日本的な雰囲気表現を表現することができた。そしてレセプションにおいて、個々の作品の制作意図を発表することで、両大学の学生間の美術に対する意見交換の場となり、有意義な機会となった。こうした学生交流展は、両大学の学生が美術作品の展示を契機とし、他国との異文化交流をも含む内容であった。

1. 八景用意展の展覧会意図について

本展覧会は山口大学教育学部美術教育教室の三年生（3名）四年生（2名）、研究生（1名）、大学院生（2名）の総勢8名の参加で行なわれた。展覧会を企画するにあたり、企画テーマを協議して決定した。台湾での展示、あるいは海外での作品展示が初めてとなる出品者が多く、日本を離れた場所での自己の美術作品の見え方をイメージして「八景用

*山口大学教育学部美術教育学生 **山口大学大学院教育学研究科修士美術専修学生

意」というタイトルを考えた。まず、台湾の人々に日本から展示に来たことへの印象をもってもらうため、日本では一般的な相撲を始めるときのかけ声の「ハッケヨーイ」と音を合わせた漢字を四文字熟語風に組み合わせて「八景用意」とした。参加者が8人いてそれぞれの美術作品を景色としてとらえての「八景」、「用意」は文字通り作品を準備するという意味と、ある空間に作品を挿入あるいは設置するという意味のインスタレーションのインストールという意味も含ませた。展覧会タイトルの意味は展覧会のオープニング時に解説された。またこの時、出品者自身からの作品解説も行なった。



「八景用意」展ポスター

2. 作者による各作品について

(1) 小松実美 (美術教育3年生) 絵画

・作品名「葡萄狩り」

私は裸婦を描くのが好きです。普段はあまり動きのないポーズで描くので、今回は動きのある姿を描こうと思いました。葡萄を採ろうとして腕を上げているところを描いています。



小松実美 (美術教育3年次)
作品名「葡萄狩り」

(2) 佐藤文恵 (美術教育3年生) 絵画

・作品名「ひとつの朝」

ある日の朝に、その日1日と向き合う気持ちを表わそうとしました。背景の階段は、登ったり下ったり、同じ道を通ったりするところが日々の心の様子に似ていると思い、描いたものです。



佐藤文恵 (美術教育3年次)
作品名「ひとつの朝」

(3) 山下真麗子 (美術教育3年生) 絵画

- ・ 作品名「仏壇とカレー—罰当たりで、ごめんねごめんね〜—」

「靴とカレー—新しいのと古いの、全部—」

日常生活は、沢山の「におい」であふれています。においは、一度かぐと、その人の中にずっと残ります。もし、一度に同時にかぐことのない、においとおいがぶつかったら、どんなにおいになるだろう？ そんなことを考えながら描きました。



山下真麗子 (美術教育3年生)
作品名「仏壇とカレー—罰当たりで、ごめんねごめんね〜—」
「靴とカレー—新しいのと古いの、全部—」

(4) 松井茉里奈 (美術教育4年生) デザイン

- ・ 作品名「思い出」「思い入れ」

観てくださった人の心に少しでも衝撃を与えたくて、この作品を作りました。思い出というとなんだか美しく聞こえますが、その思い出の中には一生消えないのではないかと思えるくらい強烈に鮮やかで、一歩間違えれば汚点になってしまうようなものもあります。それを優しく残酷に表して、皆様にドキリとしていただけないかと思えます。



松井茉里奈 (美術教育4年次)
作品名「思い出」「思い入れ」

(5) 臼杵万理美 (研究生) 絵画

- ・ 作品名「無言の対話」

この作品は、自分と向き合い心の中の自分と無言の対話をする事で、自分の気持ちを知り、そこから見えてくることもあるかもしれないというメッセージを込めて描きました。4人の人を別の紙に分けて描いたのは、一人一人が自分と対話をするということを表現したかったからです。



臼杵万理美 (研究生)
作品名「無言の対話」

(6) 梅原望 (大学院教育学研究科修士課程1年生)

絵画

- ・ 作品名「キャンディーズ」「花ごころ」「トロイメライ」

私はずっと、女の子らしい女の子になりたいと思いながら制作してきました。偶然できた色や形の中から、私の中にある“女の子”を見つけだして、それを形にしていきます。



梅原望 (大学院教育学研究科1年次)
作品名「キャンディーズ」「花ごころ」「トロイメライ」

(7) 藤井理恵 (大学院教育学研究科修士課程1年生)

映像

・ 作品名「作品集」

これらの作品は、現在までに私たち熊谷研究室が制作してきた作品です。私たちは共同作業によって作品を制作していますが、これらは研究室作品の中でも特に私たちが主体として制作した作品です。

3DCGアニメーション、数理造形映像、写真合成など、様々な手法によって作品を制作しておりますが、手描きではなくフルデジタルによってキャラクターや背景などを、作画することにより、制作者の技量の高低に関わらず一定の作画品質を持った作品を制作する技法化研究を行っています。



藤井理恵 (大学院教育学研究科1年次)

藤井理恵 作品名「作品集」

(8) 安田剛史郎 (大学院教育学研究科修士課程1年生)

絵画

・ 作品名「腰の疲労」

私は、袋を頭に被せた自分自身をモチーフとした心象表現を制作しています。今回展示した作品は、同時期に感じていた腰の疲労感を題材にし、その疲労感から開放されたいという願望を、具体物を組み合わせたイメージを通して描き出したものです。



安田剛史郎 (大学院教育学研究科1年次) 作品名「腰の疲労」

3. 出品作品について

2-(1)の小松実美の作品は紙の上に多数の色数の色鉛筆で描かれている。ぶどうの房を採ろうとする女性像だが、紙と色鉛筆だけでタブロー的な画面の張りや厚みをだしている。古典的な人物像に関わらず、明るい色を好む作者のこだわりが美しく反映した作品になっている。

2-(2)の佐藤文恵の作品は油彩の自画像である。毎日の自分の感情の変化が顔の表情に現れることに注目し、毎日過ごしている大学の風景とオーバーラップさせた。顔の部分は仮面のようにも見えて、内面を含む自己の輪郭のありようを模索しているように見える。

2-(3)山下真麗子の作品は二枚の油彩画である。臭いをテーマに自己の分身のようなキャラクターが関わっているのは、明らかに相性の悪そうな小道具的なモチーフである。この閉じられた空間における舞台装置は作者の内面を表していると思われ、喜劇あるいは悪夢のような情景で、作者の日常におけるつまずきを感じる。相反するものが化学反応を

起こして新たな局面を起こしてほしいという希求も意図されているかもしれない。

2-(4) 松井茉莉奈の作品は折り紙で小さく折られた箱である。紙による小さな作品を好む作者は、この折り紙の箱を多数用意してグリッドに合わせて並べて展示した。その並べられた箱の一つだけが粉碎されており、鑑賞者はその失われた一つの箱に思いをよせることになる。この箱は作者曰く自分自身の思い出を表していることから作者の個人的な経験における失意に関する出来事を想起させる。

2-(5) 臼杵万理美の作品はA4の紙に描かれた人物のドローイングである。油彩などのタブロー作品では表現できない、無意識的な自分自身と向き合おうとする過程で生まれて来たものらしい。描かれた人物の印象が気負わない感じや、どこか不安げな表情であることから、作者の現実社会とのずれや恐れが反映されているように見える。

2-(6) 梅原望の作品は幾つかの画面を壁面上で構成したインスタレーションで、個別の画面には鮮やかな色彩の滲みやたらし込みをつかったマチエールに少女が描かれている。作者のコメントから、この画面の色彩は“おんなの子”を意識して選択されたもので、ピンクや黄色、黄緑、オレンジ色など、少女が好みそうな色をあえて選択している。おそらく自分の中のインナーチャイルドとしての少女性を造形化したいのだと思う。偶然の滲みが生み出す効果を生かした抽象的な画面に具象的な内容を溶け込ませてうまく両者を止揚している。

2-(7) 藤井理恵の作品は共同制作によるアニメーション数本の映像作品である。登場人物に神社の巫女がいたり、ロボットが登場したり、現代の日本文化の一面を良く表していて、台北教育大学のアニメーション好きな学生に好評だった。新しい日本のイメージとしてアニメーションやゲームなどの視覚表現は大変理解されやすいメディアだと思われる。

2-(8) 安田剛史郎の作品は油彩の絵画作品で、褐色を基調にしており、古典的な技法を使った作風であるが、内容はシュールリアリスティックなディペイズマンや独特の空間設定を持ち味としている。毎回作者と思われる人物が紙袋をつけて登場するが、これはすなわち顔のない自画像表現であると思われる。

夭折した石田徹也の作品にも通ずると思われるが、石田の作品は必ず自分自身の顔をもつ人物を登場させていたのに対して、反対の立場をとっているように見える。ただしどちらも自分自身の内面を社会環境と照らし合わせてどのように再認識、再構成するのかという課題に腐心しているところは共通していると思われる。

まとめ

今回の交流展では飛行機の手荷物かトランクに詰められる大きさの作品という制限があったため、あまり大きな作品や大きな立体作品は無く大体F50号以下の大きさの平面作品が多かった。ただしメディア作品である藤井の作品はギャラリーの可動壁をつかって暗室になるブースをつくり、アニメーション映像を数本束ねた作品集的なものを上映した。この作品は熊谷研究室で共同制作したものであるが、アニメーション制作が盛んな日本でのアニメーションのいくつかの切り口を垣間みることができる作品で、台湾の学生たちも興味深く見ていた。「八景用意」の展覧会名のように、8人の出品者の作品は、それぞれ別々の景色としてあり、必ずしも、同じ傾向を意図したわけではないが、全体を俯瞰してみ

ると、安田、臼杵、佐藤、山下の作品など人物表現が多いことに気づく。非常に写実的な表現を含んだ作品からマンガなどから影響を受けた平面化されたキャラクター的な表現があった。それぞれ作者の分身的な作品が多いので、それが人物を表現することに影響しているのかもしれない。

日本でのアートシーンの流行として、80年代後半から90年代初頭において新表現主義の台頭と相反するようにポストもの派など抽象的な作品表現が流行した。2009年の学生の作風としては具象表現が一般的なのかもしれない。さらに抽象の概念を深化させてゆくことにはあまりリアリティーを感じられない現状があるように思う。造形表現を行なう依り代として、人物表現を選ぶ精神構造は、世界的な不況や将来への漠然とした不安を表すために有効なのだろう。ただし、欧米の成熟したアートシーンではミニマリズムのリチャード・セラやダニエル・ビュレンヌ、ポスト・ミニマリズムのピーター・ハリー、リアム・ギリック等、ある一定の割合で抽象表現をつづける作家たちが存在するように思う。今なお成長し、変化の途上にあるアジア、特に中国や台湾でのアートシーンでは具象表現と人物表現の作品が多い。そういった意味では今回の展示傾向に台湾の学生たちは概ね共感しているように思えた。懇親会などで個別の作品意図や思いを語り合うことによって、時代性や地域性を超えた共感と差異を感じ、国内だけでなく国際的な視点で自らの作品を見る眼を養う端緒になったのではないだろうか。おそらくはこういった具体的な体験をつむことが国際交流展の大きな意義と言えるのではないだろうか。

参考文献

- 石田徹也：石田徹也全作品集 TETSUYA ISHIDA COMPLEAT，求龍堂，2010。
美術手帖編集部＝編：現代アート事典，美術出版社，2009。